Japanese Journal of Applied Psychology
2016, Vol. 42, No. 1, 52–64

特別講演

日本応用心理学会第 82 回大会　特別講演

応用心理学会の歴史と活動，来し方と将来への期待

日　時： 2015 年 9 月 6 日（日）
場　所： 東京未来大学
司会・企画者： 角山　剛　教授（東京未来大学モチベーション行動科学部長）
講　演　者： 正田　亘　立教大学名誉教授

企画趣旨

今大会を東京未来大学でお引き受けするにあたり，大会の目玉になるような企画をと，準備委員会一同いろいろ思案をめぐらせた。東京未来大学は本年 2016 年でようやく開学 10 年を迎える若い大学であり，これから一歩ずつ歴史を積み重ねていかねばならない。そうした思いが頭にあったこともあり，本学会の長い歩みを通じてわが国応用心理学の活動の歴史を振り返り，今後に向けた課題を明示するという企画も意義があるのではないかと考えた。

わが国の心理学関連団体は，日本心理学諸学会連合加盟団体だけでも 2015 年 7 月 1 日現在で 51 を数える。しかし，82 回の大会を開催したという学会は本学会を措いて他にはない。また，本学会での活動を基盤としていくつもの学会が発足している。本学会の歴史について，少し長くなるが，藤田主一理事長が学会ホームページにお書きになっているご挨拶の中から，藤田理事長のご許可を得て引用させていただく。

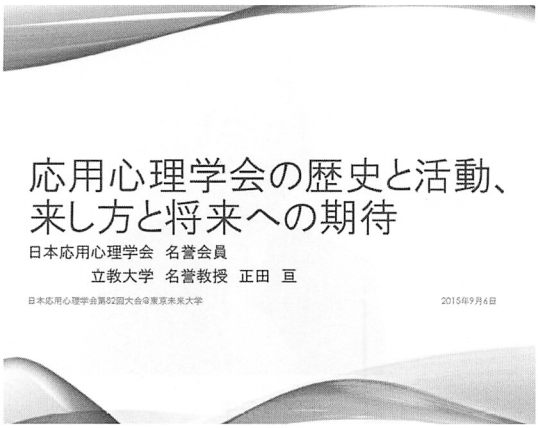
「日本応用心理学会はわが国の心理学界のなかでは日本心理学会とともに長い歴史を刻んでいる学会です。記録によりますと，昭和初期に関西と東京で応用心理学関連の研究会が会を重ね，関西では 1927（昭和 2）年 4 月に京都帝国大学において第 1 回の応用心理学会が開催され，東京では 1931（昭和 6）年 6 月に東京帝国大学で第 1 回の応用心理学会が開催されています。1934（昭和 9）年 4 月に京都帝国大学で第 1 回の合同大会，1936（昭和 11）年 4 月に広島文理科大学で第 2 回連合大会が開催され，第 2 回大会のときにはじめて「日本応用心理学会」という名称になりました。「応用心理学会」という学会名に「日本」が冠された最初ということになります。戦時による中断を経て，終戦後の復興第 1 回大会が日本大学で開催されたのは 1946（昭和 21）年 3 月のことでした。本学会は何と立ち上がりが早かったことでしょう。大会は 1957（昭和 32）年までは年に 2 回開かれ，1958（昭和 33）年 5 月の大阪大学での第 25 回大会から年に 1 回の開催になり今日に至っています。」

このような歴史を重ね，わが国心理学界に大きな影響を及ぼしてきた本学会であるが，歴史が長いだけに，その活動の歩みは若手・中堅会員の皆さんには十分に伝わっていないところもあるように思われる。引用させていただいた藤田理事長のご挨拶にあるような設立の具体的経緯に至っては，おそらく初めて耳にする会員も多いのではないだろうか。私自身について言えば，もう 40 年以上の昔になるが，学会入会と学会発表は本学会が初めてであった。大会もこれまで院生スタッフを 1 度，準備委員を 2 度経験しているが，しかし恥ずかしながら学会の歴史そのものについては乏しい知識しか持ち合わせていない。そこで，今回の大会特別企画の一つとして，長い活動の伝統をもつ本学会の歩みを振り返ることで，日本における応用心理学の歩みを振り返り，今後の活動につなげていくことを目的に，特別講演を開催することにした。

講師の正田亘先生（立教大学名誉教授・本学会名誉会員）は，安全に関する心理学的研究の第一人者であり，産業・組織心理学，人間工学，安全心理学などの分野で多くの業績を発表され，また多くの研究者を育ててこられた（僭越ながら私もその薫陶を受けた一人であり，ここでは尊敬と感謝の念を込めて「先生」と表記させていただく）。本学会では古くからの会員であり，常任理事も長くお務めになり，学会の歩みとともに日本における応用心理学の発展を率いてこられた研究者でもある。そうしたことから，今回の講演をお願いするにまさに適任の先生でいらっしゃる。

今日，心理学は仕事や生活のさまざまな場面に浸透を深め，実践の場での応用もますます盛んになってきている。本学会でも，理論的研究に重点をおく会員から，応用・実践の場で活躍する会員まで，幅広い活動が展開されているが，こうした活動が融合的に行われているところに，応用心理学研究の意味，本学会の存在意義を見いだすことができよう。大会委員会特別企画公開シンポジウム「住みにくい，生きにくい社会を well-being 社会にする―共生社会を築く応用心理学の実践―」も，そうした理論と実践の融合を実感できる内容となっている。

直近の心理学ワールドでは，国家資格としての公認心理師が制定され，資格発行に向けた動きがいよいよ本格化している。大学では現在この資格に対応するカリキュラム整備に追われている学部・大学院も多くある。心理学をめぐるこうしたさまざまなうねりの中で，応用心理学また本学会は今後どのような課題に取り組んでいくべきか，将来に向けた方向性の確認を行っておくことがいよいよ重要になる。本特別講演ではそうした思いも込めてタイトルを設定し，正田先生にお願いをした次第である。



本日の特別講演の司会を務めさせていただきます，大会委員長の角山と申します。立教大学名誉教授の正田亘先生のご講演に先立ちまして，本講演の企画趣旨とご講演者の正田先生のご紹介をさせていただきます。

日本応用心理学会は今大会で82回を重ねています。いまではたくさんの心理学会が存在していますが，82回もの大会を開催したという学会は本学会だけだと思います。それだけ歴史のある学会でありますが，会員の皆様がどれだけ本学会の歴史をご存知かといいますと，おそらく振り返ることのできる方はそう多くはいらっしゃらないと思います。私はその昔，豊原恒男先生が大会委員長となって立教大学で開催された大会を，大学院生として初めてお手伝いしました。心理学会の会員になったのも本学会が最初でしたので，かなり長い会員歴になりますが，それでも学会の歴史については知らないことがたくさんあります。

本学会も若い研究者の方や中堅どころとしてご活躍中の会員も大勢いらっしゃいます。本学会がどのような経緯で発足し，どのような活動を経て今日に至っているのか，このあたりで一度本学会の来し方を振り返り，将来を考えてみることも有意義であると思います。

このような企画意図のもとで進めてまいりましたが，構想の段階で既に私の頭の中には，ご講演をお願いするのは恩師でもある正田亘先生以外にはいらっしゃらないという思いがありました。先生にお電話でお願いしましたが，正田先生は当初固辞されておりました。しかしながらその後も何度もお願いを申し上げ，先生も最後には折れて下さり，快くお引き受けいただくことができました。私はその時点で企画の成功を確信いたしました。

正田先生は1932年のお生まれで，立教大学文学部心理・教育学科をご卒業後，大学院文学研究科応用心理学専攻に進まれ，その後大阪大学より学位を取得されています。長く立教大学文学部教授をお務めになり，ご定年後は2005年3月まで常磐大学人間科学部教授として教鞭をお執りになりました。現在は立教大学名誉教授でいらっしゃいます。皆様ご存知の通り，正田先生は安全に関する心理学的研究の第一人者でいらっしゃり，労働大臣功労賞をはじめ，中央労働災害防止協会顕功賞，日本人間工学会功労賞なども受賞されていらっしゃいます。産業・組織心理学，人間工学，安全心理学などに関して多くの著書や論文をお持ちです。

正田先生は本学会での活動歴も大変長く，1974年から2003年までは常任理事もお務めになりました。現在は名誉会員でいらっしゃいます。またこの間，日本人間工学会理事や，産業・組織心理学会会長もお務めでいらっしゃいます。

本学会における先生のこれまでの足跡からも，今回特別講演を正田先生にぜひともお願いしたいという大会委員会の意図をご理解いただけるのではないかと思います。

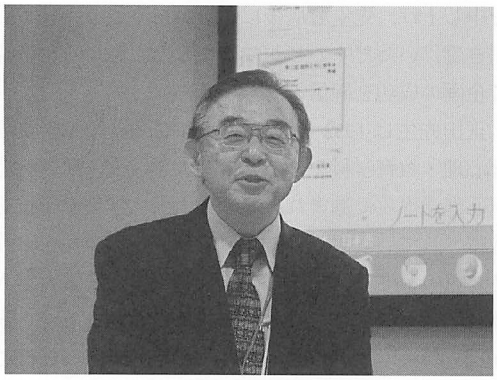
ご紹介が長くなりましたが，正田亘先生にご登壇いただき，早速ご講演を賜ることにいたします。正田先生，よろしくお願い申し上げます。

はじめに

角山先生，ご紹介をありがとうございました。ただ今ご紹介いただきました正田と申します。

本題に入ります前に，若干の弁明と謝意を表したいと思います。

実は，この講演の依頼がございましたのは，今年の4カ月前の5月半ばごろでしたでしょうか。私は講演の内容を見て，「私よりもっと適切な方がいらっしゃる。ぜひ，そちらの先生にご依頼いただきたい」と何回も固辞をいたしました。例えば，日本大学名誉教授で，本学会の名誉会員であられます大村政男先生がまさにその第一人者であります。私は，「ぜひ大村先生に」というふうな形で固辞をしてまいったところです。そうしますと，大会委員長



角山剛先生

正田亘先生

の角山さんから，「恩師たるもの，教え子の提言を拒否するとは何事か」とお叱りをいただきました。もっとも実際のトーンはもっと低いものでありましたが……。私はこの「恩師」という言葉に大変弱いものでして，私の恩師，豊原恒男先生は本学会の大会委員長を通算3回，事務局長も3年間お務めになっております。さらに，豊原先生の恩師であられる淡路圓治郎先生もまだ当時立教大学に在職され，社会学部を創設されたり，本学会の第8回の大会委員長などもお務めになっております。そういうことからどうしても断り切れませんでした。

ただ，私がためらった理由は別にございました。

私は，1998年3月，立教大学を定年退職いたしました。同じ年の4月から，先ほどご紹介いただきました茨城県水戸市にあります常磐大学人間科学部の専任教授として7年間勤めさせていただきました。その後も大学院の特任教授，非常勤講師などを勤めさせていただいたんですが，退職をする際，私の研究室の図書の大半を，当時常磐大学の専任として赴任され，また，本学会の研究奨励賞を受賞されておられる申紅仙（シンホンソン）准教授の研究室に寄贈いたしました。寄贈した図書の中には，各種学会の機関誌，大会発表論文集などすべて含まれておりました。したがって私の手元にはそういうものを一切持ち合わせておりませんので，私としては機関誌，あるいは大会発表論文集などを精査して応用心理学研究の特色を把握したかったわけでありますが，それも叶いません。しかし，申准教授が『応用心理学会史』はじめ数種の資料をご持参いただきました。また，本学会の理事長を務めておられます藤田先生からのご指示で，学会の事務局の川島さんから事務局変遷に関する詳細な資料も頂戴いたしました。さらにまた本講演のためのパワーポイントの資料の作成に尽力いただいた，海上技術安全研究所の吉村主任研究員，ならびに東京未来大学の鈴木事務局長はじめ，スタッフの皆さん方に資料の印刷，作成等もお願いいたしました。これらの方々に感謝申し上げたいと思います。

さて，先ほど角山委員長は「恩師」という言葉を使われましたが，彼は私のゼミ生ではありません。しかし，当時，私が担当しておりました心理学特講，人間工学の授業に出席されておられました。教室の前列正面中央に着席し，毎回熱心にノートを取っておられた勤勉な学生さんであります。その彼が，心理学科の4年後輩の私のゼミ生であり，素晴らしい卒業論文を書かれた絶世の美人，川島美子嬢と結婚したということを後に知りまして，私は驚きもしましたが納得もしました。まさに美男美女カップルの誕生であります。こうしたDNAを受けておられるせいか，ご長女の方が現在アメリカの大学，大学院を修了され，シカゴでNPO関係の法人でご活躍をされていると聞いております。また，お孫さんもおられます。この方々，お孫さんに会い，良きグランドパパ振りを発揮するために，毎年1回渡米されるそうでありますが，先日，私へのメールに，後ろ髪を引かれる思いで帰国したというようなことを書かれておりました。

このようなプライベートのお話をすることは大変不謹慎とは思いますが，実は先週，明治大学で開かれました第31回の産業・組織心理学会で彼の了解を得ております。したがって，このようなことを申

し上げますのは，彼の家庭がいかに素晴らしいものであるかということをぜひ皆さん方にご理解いただきたく申し上げた次第であります。

応用心理学会の誕生とその後の展開

それでは，本題に移らせていただきます。

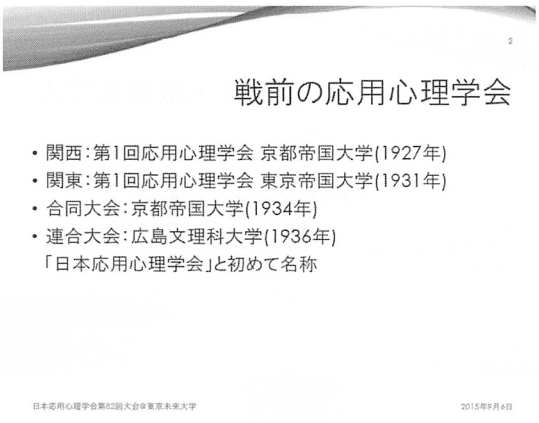
まず最初の戦前の応用心理学会でありますが，応用心理学の研究は，関東よりむしろ関西の方が進んでいたように思われます。

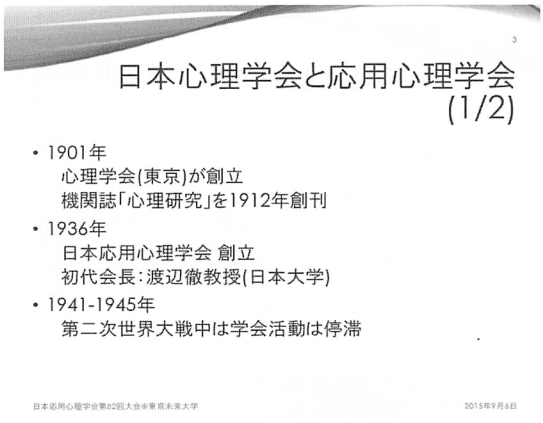
1927年，第1回応用心理学会が，京都の帝国大学で開催されております。その4年後に関東で，東京帝国大学で第1回の応用心理学会が開かれております。また合同の大会が1934年，連合大会が1936年に当時の広島文理科大学で開かれております。この1936年に開かれました連合大会で初めて「日本応用心理学会」という名称が名付けられたようであります。したがって，日本応用心理学会の歴史は1936年にさかのぼると言っても過言ではないかと思います。

もちろん，応用心理学会よりも古い学会はご承知のとおり，日本心理学会がございます。1901年に心理学会が東京で創立され，機関誌「心理研究」を1912年に創刊しております。一方，1936年に日本応用心理学会が創立され，初代の会長は日本大学の渡辺教授でいらっしゃいました。1941年から1945年，第二次世界大戦中，学会活動は停滞とありますが，これは多くの心理学の先生方が軍隊に徴兵された結果であります。私の恩師，豊原恒男先生も陸軍技術部に配属され，落下傘部隊の教育訓練計画を策定するため，自ら背中に落下傘を背負い，地上に降下した体験を何度もしたということを伺ったことがございました。

同じ陸軍には，光文社のカッパブックスから戦後，心理学者として初めてベストセラーを書かれた望月衛先生，あるいは，日本心理学会の理事長，健康心理学会の理事長などお務めになられた本明寛先生などもおられます。海軍には，人事院から広島大学の教授に移られた兼子宙先生，あるいは大阪大学，さらには中京大学の教授をお務めになられた鶴田正一先生がおられます。鶴田先生は，中京大学在職中，日本応用心理学会第48回大会の大会委員長をお務めになられたことがございました。実は望月先生と鶴田先生は，立教大学に非常勤講師として来られております。私ども両先生が来られる日は，大変楽しみにしておりまして，助手室で昼食を共にしながら，先生方のお話を伺ったことがございました。ちょっと横道に逸れますが，両先生のエピソードをぜひご紹介させていただきたいと思っております。当時は，amazonや楽天がございません。したがって，私どもが外国語の研究書を注文する際は，日本出版貿易，あるいは海外出版貿易，さらには丸善を通じて研究書を購入するしか手立てがなかったわけです。望月先生は，実はご親族の方が日本出版貿易におられた関係から，私どもによく「君たちはあまりお金を持ってないだろう。もし，洋書を買うなら俺が斡旋してやって少し安くしてやるから，ぜひ俺に頼みなさい」というようなことをおっしゃっていただきました。私は，東京本郷にあります望月衛先生のご自宅まで何回も洋書を受け取りにまいったことがございます。

一方，鶴田正一先生は，当時はまだ日本国有鉄道，現在のJRでありますが，その労働科学研究室の室長を務めておられました。労働科学研究室とい





うのは，現在，関係者がこちらにもおられますが，実はその研究室の中に人間工学研究班がありまして，東海道新幹線の運転室，特に椅子なんかの設計を橋本邦衛医学博士の方々がやられたことがございます。

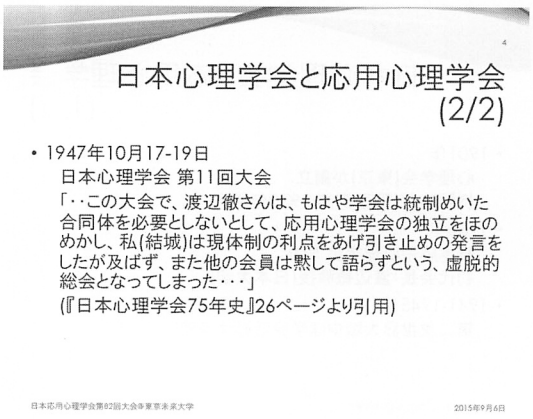
その関係で，鶴田先生は私ども研究室のスタッフをこの新幹線，まだ試験走行中でありましたが，静岡県の三島の近くに試験走行線路があり，そこにご案内いただきました。列車のスピードメーターが200キロを超えたときに，お互いVサインなんかを出し合って写真を撮り合ったことがございました。実は，鶴田先生は大変な奇行の方で，また珍しい行動の持ち主でいらっしゃいます。中公新書から『事故の心理』という本をお書きになっておられます。その『事故の心理』をお書きになった先生が，ご自分の運転された車を大型トラックの後部に追突をされ……，というようなことを大変得意げにお話になっておりました。また国際会議でヨーロッパに行かれた際，イタリア，ローマだったと思いますが，背広の下の腹巻きの中にキャッシュを入れておられたそうです。そのキャッシュをすり取られたというようなお話もなさっておりました。さすがにどのようにしてすり取られたかは，先生，お話いただけませんでしたが。このような大変珍しい先生でありますが，立教大学の非常勤をお辞めになる際，「正田君，俺もとうとう『海軍における心理学的研究』という題名の博士請求論文を東京大学に提出したよ。君たちも早く学位を取りなさい」というような励ましの言葉をいただいたことをいまだに鮮明に記憶しております。今，両先生のお話を申し上げたわけですが，こういう先生方が日本に戻られ，1949年の新制大学発足と同時に各種の国公立，私立大学の心理学研究室に入られ，心理学的研究を活発に行われました。

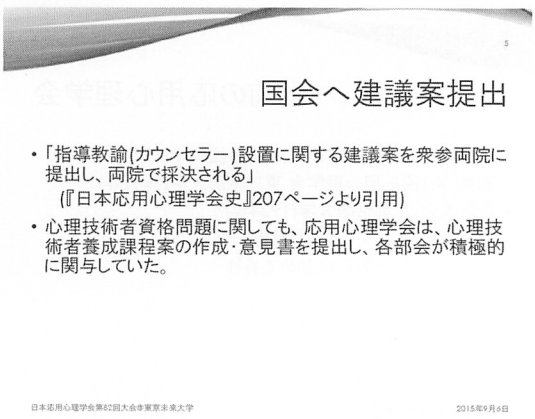
他方，恩師の豊原先生は，第20回日本心理学会を開催され，大会委員長をお務めになられました。40年後の第60回日本心理学会を私が大会委員長として立教大学で開催させていただきましたが，そのときの資料，写真等を日本心理学会の事務局に送ったことがございました。その関係で，日本心理学会から『日本心理学会75年史』という本を2冊寄贈していただきました。たまたまその1冊が私の自宅の書斎にありましたので，先日それを繙いておりますと，26ページにこのような記載がございました。「この大会で，渡辺徹さんは，もはや学会は統制めいた合同体を必要としないとして，応用心理学会の独立をほのめかし，私（これは北海道大学の結城先生であります）は，現体制の利点をあげ，引き止めの発言をしたが及ばず，また他の会員は黙して語らずという，虚脱的な総会となってしまった」というような記事がございました。ですから既に当時から基礎系の心理学を重んずる先生方と，応用系の心理学を重視される先生方の間には，相当の軋轢，葛藤があったように思われてなりません。

日本応用心理学会の活動の一環としての国会への建議案提出

次は，当時の応用心理学会の活動の中で，非常に社会的活動として顕著な事柄をいくつかご紹介したいと思います。

その中の1つに国会へ建議案を提出したことがございました。「指導教諭（カウンセラー）設置に関する建議案を衆議院，参議院両院に提出し，両院で





採決される」というような記事が『日本応用心理学会史』207ページに記載されております。昨日の総会で，谷口副理事長が心理学諸学会連合のお話をなさったときに，9月に議員立法で，現在問題になっている国家認定の心理師，この資格がどうやら通りそうだというようなお話をしていただきました。そういう心理技術者資格問題に関しましては，日本応用心理学会は心理技術者養成課程案の作成・意見書を何度も提出し，各部会が積極的に当時から既に関与しておりました。今回，もしこれが成功に至れば，大変おめでたいことではないかというふうに思っております。

日本応用心理学会当初の年次大会

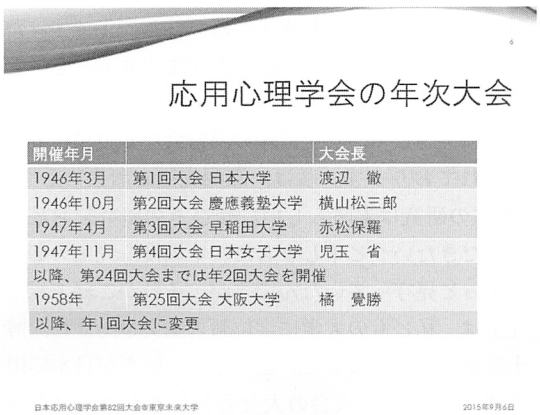
次は，応用心理学会の年次大会のことです。年次大会は1946年，終戦の翌年3月に第1回大会が日本大学で渡辺大会委員長を中心に開催されております。同じ年の10月に，第2回大会が慶應義塾大学で横山先生を大会委員長として開かれております。以下，24回大会までは年2回，春と秋に応用心理学会の大会が開催されていたわけです。

実は，私ども大学院在籍のころ，指導の先生方から「学会というものは，自分の研究を公開の場にさらし，諸先輩の先生から意見をいただき，それを将来の研究の発展につなげることができる有用な会である。君たち，学会で積極的にどんどん発表しなさい」というようなご指導を受けました。日本応用心理学会では春，秋2回，中間に大体，夏期に日本心理学会が大会を開いておりました。その日本心理学会で発表いたしますと，年に3回，研究発表のチャンスがございました。数が多ければ多いほど良いというものではございませんが，研究の場がたくさんあるということは非常に結構なことではないかと思っております。

また当時，応用系の心理学の珍しい学会の1つに，日本航空宇宙医学心理学会（現在：日本宇宙環境医学会）という学会がございました。これは，主に医学系の先生が中心なんですが，当時の教育大学の小保内虎夫先生，恩師の豊原恒男先生らが中心となりまして，心理学の面からも航空医学に携わることが必要であるということで，航空医学心理学会にも入らされました。ですからそこで発表しますと，さらに回数が増えました。このようなことで，年2回の大会が行われていたというのが，日本応用心理学会の大きな特徴ではないかと思います。

実は，第25回の日本応用心理学会で，私は「Morale Surveyに関する研究」を発表しましたのが，この写真です。当時の学会では，写真撮影がプログラムの中に掲載されておりました。全員参加ということが習わしとなっておりました。この全員参加の写真撮影というのは大変珍しいもので，日本応用心理学会のみに限りません。後ほどご紹介いたしますが日本心理学会でもやっておりました。年次大会に全員参加で写真を撮影するということは，学会への参加感と申しますか，ロイヤリティを高めるというようなことで非常に有効ではないかと思います。ぜひどこかの大学で今後大会を開かれるとき，強制的にでも全員参加の写真撮影というようなことを行われてはいかがかと思います。

日本応用心理学会のみが写真撮影を行っていたのではないという証拠があります。お手元には何か脱落しているようでありますが，日本心理学会第22回大会が慶應義塾大学の日吉校舎で行われました。



開催年月		大会長
1946年3月	第1回大会 日本大学	渡辺　徹
1946年10月	第2回大会 慶應義塾大学	横山松三郎
1947年4月	第3回大会 早稲田大学	赤松保羅
1947年11月	第4回大会 日本女子大学	児玉　省
以降、第24回大会までは年2回大会を開催		
1958年	第25回大会 大阪大学	橘　覺勝
以降、年1回大会に変更		

写真に写っているのはものすごい会員数ですね。先ほどの日本応用心理学会第25回大会の写真は，前列に当時の東京教育大学，現在の筑波大学の小保内虎夫先生，日本女子大学の児玉省先生，北海道大学の結城先生，ずらりと著名人が並んでおられます。私も確かこの辺にいるはずなんですが。これが日本心理学会のこんな多数になりますととても見分けられません。かつて私は，日本心理学会第22回大会で何人参加しているのか，数を数えようとしたことがあるんですが，とても数え切れませんでした。約400名近い人数がいたと思っています。私は，日本応用心理学会第22回大会で発表しましたのは，「心的疲労に関する研究II」です。大学院在籍のころ，後ほどご紹介いたしますが，日本応用心理学会が編纂した『心理学講座』が刊行されておりました。その中に『経済心理学の諸領域』，あるいは，のちに『人事考課』をお書きになられた産業心理学者の安藤瑞夫先生がおられます。私は安藤瑞夫先生の演習を取っていたんですが，先生は大変ドイツ語が堪能でいらっしゃって，先生の演習は全員……，全員と言っても当時同期生は1人のみで，ですから私を入れても2人ですが，ドイツ語の論文を読まされるわけです。当時，研究室で取っておりました，確か『Arbeit-Wissenschaft』に掲載されている論文を毎回読ませられました。読んだ論文の中に，精神疲労をロールシャッハ・テストで測定した大変珍しい研究がございました。H. V. Bracken や J. Voigt 等がやられた研究です。その研究を私が翻訳して紹介しますと，安藤先生は「大変この研究は珍しい。ぜひ，君，この研究を修士論文としてやったらどうか」と言われまして，その研究を行って学会で発表させていただきました。

私は学部を卒業して，すぐ大学院に入りました。その大学院の名称が日本で唯一の文学研究科応用心理学修士課程でした。応用心理学という「応用」がついていた大学院でした。ところがこの応用がついていた大学院が，数年後に実験心理学の教授が来られまして，その名前が消えてしまいました。文学研究科心理学修士課程になってしまって，大変残念に思いました。

文学研究科応用心理学修士課程の1年のときに，日本応用心理学会や日本心理学会に入らせていただきました。精神疲労の測定をロールシャッハ・テストで試みるという研究を修士論文のテーマに選びました。当時としては，精神疲労の測定は，フリッカー検査，色名呼称検査，自覚疲労症状調査，これらを使うのが通常の習わしでありました。ところが，投影法を使って精神疲労の測定を行うという実験は，ほとんど世界では行われておりません。修士論文の実験でそれを試みました。ただ実験参加者の方に作業前後にリテスト，再テストを行う必要があります。ですから，ロールシャッハの原図版だけではとても実験ができません。したがって，同一対象者に2回，3回目と行える Behn-Rorschach や Harrower-Rorschach の図版が必要となります。これらの図版を先ほどご紹介申し上げた望月衛先生のご斡旋で海外から取り寄せ，これらを実験材料として使わせていただきました。日本心理学会第21回大会が九州大学で開かれたとき，私が発表を終わりますと，休憩の時間に背の高い，がっしりとした体格の先生に廊下に呼び出されました。私は新米会員でありますので，先生のお名前を存じ上げません。その先生が，「君，ロールシャッハ・テストを使って疲労の測定をやるのは大変珍しいよ。ぜひこの研究を継続的に続けたまえ」と激励していただきました。この先生は後でわかったんですが，本学会の名誉会員であられ，先年ご逝去された太田垣瑞一郎先生でありました。このように，先輩の先生方が新米の会員に対して，指示，激励の言葉を投げていただく，こういうことは非常に有効なんです。したがって。私も年を取りまして，学会に出ては，いい研究があると，その先生とお会いして，「ぜひ先生の研究を続けていただきたい」というようなことを申し上げたことがございます。

端的にあえて申しますと，本学会の機関誌編集委員長をなさっておられます，深澤伸幸先生です。だいぶ昔でありますが，「危険感受性テスト」を学会で発表されました。大変珍しいテストを運転者の方々に実施して，安全管理の講習会などで積極的に使われております。私は，深澤先生とお会いして，「先生の研究は素晴らしい。ぜひその研究をお続けいただきたい」と申しました。その後，先生の研究をずっと見守っていたんですが，それがご縁で深澤先生は，私どもの大学に学位請求論文を出され，博士号を取得されました。私が主査，副査が日本応用心理学会第34回大会の大会委員長をお務めになっ

た清宮栄一先生でありました。このように，若い研究者の人々に先輩の方々が指示，激励，アドバイスをするというようなことは非常に有効であり，ぜひ皆様方にもやっていただきたいと思っております。個人的なことを申し上げて失礼しました。

日本応用心理学会の各部会構成

次は，応用心理学会内の部会であります。当時，応用心理学会には5つの部会がございました。**教育，犯罪，臨床，相談，産業**，この5部会であります。

教育部会は，のちに日本教育心理学協会を設立し，それが日本教育心理学会へと発展したのが1959年であります。

犯罪部会も1963年に日本犯罪心理学会を立ち上げております。

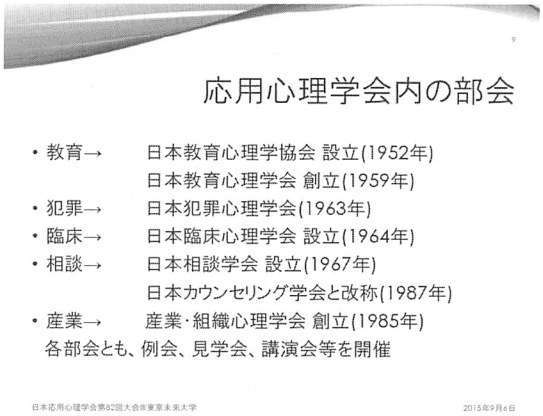
臨床部会は，日本臨床心理学会が1964年に設立されております。

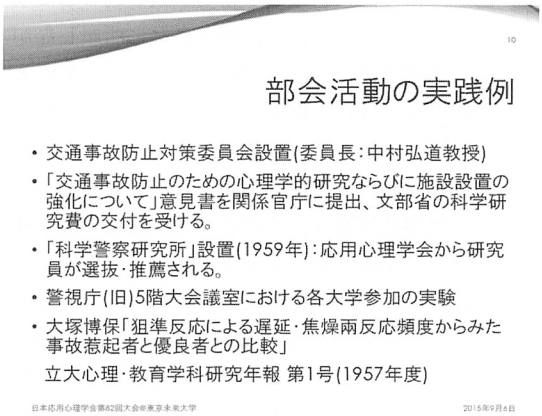
相談部会は，日本相談学会が1967年に設立されましたが，1987年に日本カウンセリング学会と名称が変わっております。

一番遅く学会が立ち上がったのが**産業部会**でありまして，産業・組織心理学会は1985年に創立され，先月，第31回大会を明治大学で開催しております。

各部会とも例会，見学会，あるいは講演会を積極的に行っておりました。昨日，公開シンポジウムで東京未来大学の出口こども心理学部長先生が少年鑑別所をスタートとして，さまざまな刑務所をお回りになられたというお話をなさっておられました。あの少年鑑別所が廃止されると報道されたことがありました。その廃止という報道を聞いた途端に，犯罪部会の先生方がすぐ関係各省に意見書，陳情書を提出しました。当時，心理学者として参議院議員をお務めになられていた高良とみ先生がおられます。高良とみ先生にも部会は働きかけをしました。幸いこの少年鑑別所の廃案というのは，後に沙汰止みとなりました。鑑別所は心理職として非常に多くの方々が働けるところであります。

こうした各部会の例会，見学会，講演会とは別に，部会以外に各種の委員会が設置されております。交通事故防止対策委員会がその一例です。委員長は，東京大学の中村弘道教授でありました。中村先生が委員長だったこの交通事故防止対策委員会はさまざまな意見書を提出したり，実践的な研究を





行っております。「交通事故防止のための心理学的研究ならびに施設設置の強化について」という意見書を関係官庁に提出したり，文部省の科学研究費の交付も受けておりました。さらに1959年，東京の九段に科学警察研究所が設置されました。科学警察研究所が設置されて，日本応用心理学会からも研究員が選抜・推薦されております。本学会の名誉会員であられる大塚博保先生は，その第一号の方であります。大塚先生は，科学警察研究所で各種の適性検査を開発され，非常に多くの業績を上げておられます。

委員会の活動の中で，私自身が直接参加した実験がありますので，それをちょっとご紹介申し上げたいと思います。現在，東京の皇居堀端の桜田門のそばに立派な警視庁の庁舎が建っております。あの庁舎が古い庁舎のころに大会議室で日本女子大学，立教大学，東北大学，その他いろんな大学の方々が集まって，さまざまな研究を行っていました。私ども

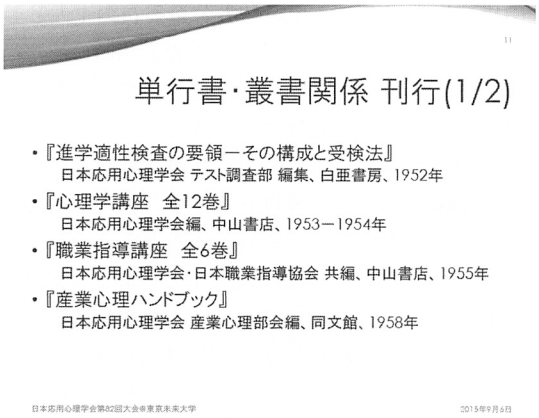
の大学は，先ほどの科学警察研究所に行かれました大塚博保さんが当時研究室の副手であられまして，彼が主宰し，私どもは院生としてその実験の助手をいたしました。どんな実験をやったかと申しますと，今ここに針があります。針が左から右に移動します。ちょうど1秒かかります。その針がまた元へ戻ってくるのに1秒。この針が左から右に移動して，元に戻ってくる，ちょうど中間地点に大きなマークを施してあります。この左から右に移動して，中間地点に来たら反応キーを押しなさいという狙準反応実験です。当時，警視庁でありますからタクシードライバーは容易に集められました。そのドライバーの中で，人的事故と物的事故を起こした事故傾向者の方々，それから，同一会社に所属しながら十数年間無事故無違反の優良運転手の方がいます。最近でもときたま個人タクシーの中で，運転席の前面フロントガラスのところに「優」マーカーをつけた車を見かけますが，あの方々が優良運転手の人です。無事故無違反。その無事故無違反の優良運転手の方々と事故を起こした事故傾向者の方々，これらを比較して前述の狙準反応の実験をしたわけです。そうしますと，針が右に移動して元に戻って，ちょうど中間のところでピタッと同時に反応キーを押しますと，どうしても人間には反応時間がかかります。ですから1.5秒よりやや遅れるわけです。ところが，針がこちらに移動して元へ戻って中間地点に来る直前に反応キーを押してしまう人がいます。そうすると，反応時間は1.5秒より時間が早くなります。1.5秒を超える人々を大塚さんは，遅延反応者。さらにこの1.5秒以前に反応キーを押してしまう人々を焦燥反応者と呼びました。この焦燥反応者の方々が圧倒的に，事故傾向者が多かったのです。一方，遅延反応者の方々が圧倒的に優良運転手に多いという結果が出ました。私はそばで見ていて驚くべき結果だということを実感いたしました。統計的にももちろん有意差が出ておりました。立教大学心理・教育学科研究年報（1号）に大塚さんは発表されておられますので，もしご関心がある方はご覧いただければと思います。こういう実験を単に行うというだけではなくて，これらの実験結果を実際に参加いただいた関係のタクシー会社にフィードバックいたしました。そして焦燥反応者の方々にはもちろん，安全運転をしていただくようなことを個人の特性を踏まえながら教育指導を行います。このように，安全管理に積極的に役立てるようなことを当時の日本応用心理学会の部会，あるいは委員会が行っていたということがございました。

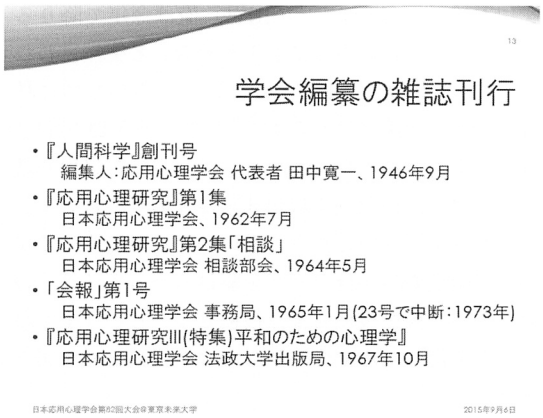
さらに豊原先生がフルブライトでアメリカに行かれまして，さまざまな交通事故防止対策のことを学んでこられました。日本に戻られて警察庁や警視庁と協力して，ある実験が当時，東京都内で行われました。どういう実験かと申しますと，運転者が運転して交差点にまいります。交差点が赤信号になって，もちろん車は止まります。その信号が赤から青に変わりますと，当然，車は前にスタートするわけです。ところが先ほどのような焦燥反応者の方は，前方の信号を見ないで，横手の信号が橙色から赤色に変わるのを見ながらスタートします。いわゆるフライング行動です。こういうようなことがあったんで，豊原先生は警視庁に進言をしました。競馬場の競争馬の前しか見えないような目隠しを応用しました。横手の信号灯のカバーとして長いものをつけたんです。そうすると，運転手が横の信号を見ようとしても筒が長いですから色の変化が見えないんですね。それが東京都内に何カ所か設置されました。現在はほとんど見あたりませんが，一時期，その信号がフライング行動の多い交差点で有効に活用され，私自身も現場に行って見学，あるいは写真撮影を行ったことがございました。

社会活動の一環としての出版活動

こうした部会活動が非常に積極的に行われていたということがありますが，それ以外に当時の応用心理学会は，さまざまな単行書，本を刊行しております。

最初に1952年，テスト調査部が編集して白亜書房から『進学適性検査の要領―その構成と受検法』という本が出されております。この進学適性検査と申しますのは，現在で言いますとセンター試験のようなものに該当します。しかし性質はちょっと異なりまして，私どもは進適，進適と呼んでおりましたが，国立大学を受験する高校生は必ずこの進学適性検査を受けなければならない。そして，その得点が一定得点以上ないと国立大学を受けられない。そういうメカニズムになっていたわけです。私どもはこの進適に随分悩まされました。ところが大学に進学して，進学適性検査の作成委員の1人が豊原先生で

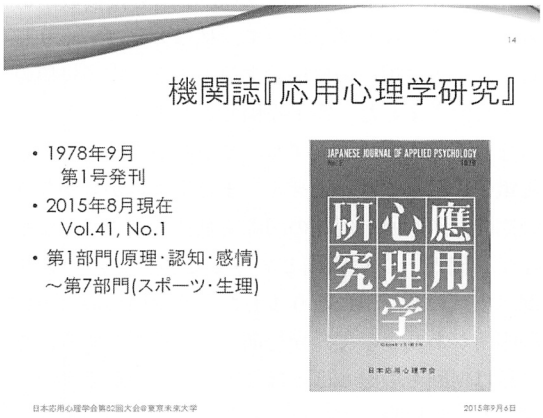




あったということが後にわかりまして，私は先生に，「随分，われわれは先生方の作ったテストで苦労した」というようなことを申し上げたこともございました。

それから一番重要なのは，この『心理学講座　全12巻』，中山書店から刊行されております。これはケースに入って分冊になっておりますが，先ほど安藤先生が「経済心理学の諸領域」，豊原先生は，「疲労」の本をそれぞれ講座の一環として出しておられます。これは非常にわれわれとしては参考になりました『講座』でありまして，実は1954年の文化の日であったと思いますが，この『心理学講座　全12巻』が毎日出版文化賞を受賞するというようなこともございました。それから職業指導協会と共編した，『職業指導講座　全6巻』が中山書店から出ております。さらに産業心理部会が編纂した『産業心理ハンドブック』，これは小型でありますが非常に分厚い本でありまして，私ども随分活用させていただいた記憶がございます。1958年に同文館から出ております。加えて，小保内虎夫先生が編纂された『渡辺徹　心理学論文集』が新生社から1959年，『ロールシャッハ・テストの実際適用例』が誠信書房から1960年，労働科学研究所から『日本産業心理関係文献目録』が1963年に刊行されております。

また，学会が編纂した雑誌もございました。『人間科学』創刊号が文化功労賞をもらわれました田中寛一先生を代表者として，1946年に出ております。『応用心理研究』の第1集が1962年，第2集が「相談」特集号として，1964年，さらに第3集が「平和のための心理学」が法政大学出版局から1967年



に刊行されています。また，『会報』も第1号が1965年の1月に刊行されました。ただ，この『会報』は23号で1973年に中断したようでございますが，残念でなりません。

次は機関誌『応用心理学研究』であります。現在，画面に出ておりますのは，第2号であります。1978年の9月に第1号が発行されました。確か第1号の表紙は赤かったと思います。この表紙のデザインは，慶應義塾大学の太田垣瑞一郎先生のデザインによるものであります。実は，第1号の編集委員長は労働科学研究所の所長をお務めになられた西岡昭先生でした。以下，敬称を略して言わせていただきますと，秋葉英則，長谷川孫一郎，平野馨，神作博，永田良昭，大塚博保，私，以上8名でありました。第1号が刊行されてから後に，しばらく経ってからでしょうか。私は，西岡先生を慰労するために，当時私が行きつけの赤坂の「かつ富」という居酒屋に彼を招待したことがあります。酒を飲んで店

を出た途端，彼から，「正田君，俺は今年で降りるよ。来年から君にやってもらうから」と突然言われまして，酔いが一気にさめました。そのために私は，機関誌の第2号から15号まで，通算12年間に亘り編集委員長をやらされました。当時の応用心理学研究には，投稿論文数が非常に少のうございました。もう全然ないと言ってもいいぐらいです。ですから各編集委員が身の回りを駆けめぐって，若手の研究者に「ぜひ投稿せよ，投稿せよ」というようなことを催促したんですが，なかなか投稿論文が届きません。

昨日の総会で現在の編集委員長をなさっている深澤先生が電子投稿を始めてから97本も投稿数があるというようなお話を伺って，私はもうびっくりしました。実に現在の投稿論文数の多さ，電子投稿の多さに驚きました。電子投稿でありますと，いろいろな校正がすぐできますね。ところが当時はもちろん電子投稿もございません。また第1号からかなりの期間，印刷所が現在の国際文献社ではございませんで，確か一ツ橋印刷というところだと思いますが，東京の五反田にありました。五反田の坂の上に印刷所がありまして，発行前，出張校正をするために私は何回も坂をとぼとぼと上った記憶がございます。もし私自身天国に行けるならば，ぜひ西岡さんにこの恨み辛みを述べたいというふうに思っております。今は，このVol.41, No.1と先ほども申し上げましたように，第1部門から第7部門まで非常に多彩な領域があって，投稿数も非常に多いということで大変結構ではないかというふうに思っております。

国際応用心理学会開催

次は，国際応用心理学会第22回大会の開催の件であります。1990年，京都の国際会議場で世界48カ国から1,849名が参加しました。シンポジウム108，基調講演30，ポスター発表621，コロキウム，円卓討議等が活発に行われました。日本応用心理学会の会員の方が司会者，オルガナイザーとして組まれたシンポジウムもたくさんございました。もちろん，こうした大規模な国際会議は日本応用心理学会単独で行えるものでは決してございません。ですから主に日本心理学会が中心となって，募金委員会も結成されました。当時の募金委員会の委員長は，明治大学学長をお務めになられ，先年ご逝去された山田雄一先生であります。私も募金委員の1人として，いろんな関係会社を回りました。当時はまだ経済状況も良かったわけでございますので，かなりの賛助金，協賛金を獲得した覚えがございます。昨日の総会でもお話が出ていましたが，来年，横浜でICP（国際心理会議）が開かれます。日本応用心理学会も既に協賛なさっておられるようですが，先般，日本心理学会から個人宛にもこの募金の案内書が来ておりました。やはりこうした国際会議というものを成功裏に収めるためには，法人や関係団体以外に個人の協力も必要でありまして，私も積極的に募金に応じようと思っております。

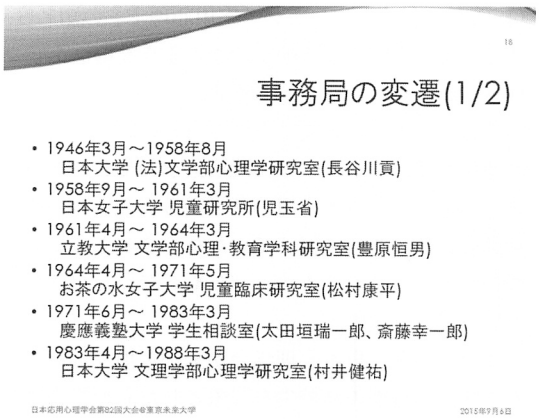
日本応用心理学会認定の「応用心理士」への要望

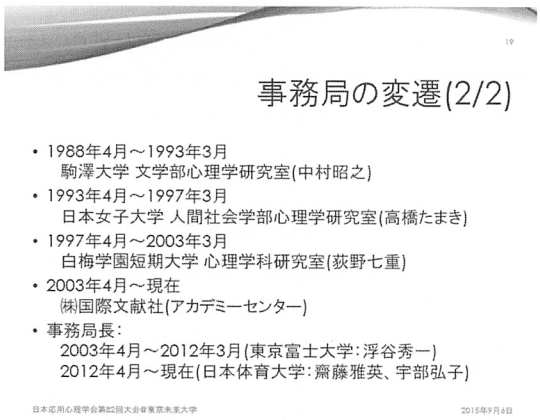
次は，「応用心理士」の資格導入の件です。1993年，日本応用心理学会認定の応用心理士の資格審査が開始されて，レジメには現在，130名とありますが，これは間違いであります。256名と数をご訂正いただきたいと思います。昨日総会でこの委員長であられる外島先生が350名前後というような数をおっしゃいましたが，先ほど伺いますと名簿に登録した数が325名，実数が256名と，これほど増えております。数年前に浮谷先生にお伺いした当時はわずか百数十名というようなことで，私は，ついこの数を書いてしまいましたが，昨日この総会に出て良かったと思います。数が増えております。しかし，256名と申しましても，会員数の20%に過ぎません。学会員の中で自分の学会が出している資格を20%しか持ってないということは，いかにこの資格が魅力ないものであるかというようなことがわかるのではないかと思います。後ほど申し上げますが，積極的にこの「応用心理士」の発展を望むようなことを企画いただければと思っております。

事務局の変遷ならびに組織の改革

事務局の変遷であります。これは冒頭申し上げましたように，事務局の川島さんから，詳細な資料を送っていただいたわけであります。

○ 1946年から1958年にかけて，日本大学法文学部心理学研究室の長谷川貢先生。
○ 1958年から1961年にかけて，日本女子大学児童研究所の児玉省先生。
○ 1961年から1964年にかけて，立教大学文学心理・教育学科の豊原恒男先生。
○ 1964年から1971年にかけて，お茶の水女子大学





児童臨床研究室の松村康平先生。

○ 1971 年から 1983 年にかけて，慶應義塾大学学生相談室の太田垣瑞一郎先生，斎藤幸一郎先生，お二人の名前が挙がっておりますが，これは太田垣先生が当時会長におなりになられてから斎藤幸一郎先生が引き継がれたわけであります。私が常磐大学に赴任したとき，常磐学園には常磐短期大学という短期大学がありまして，その常磐短期大学に斎藤幸一郎先生。それから同じ編集委員を務めた平野馨先生がおられまして，久し振りの再会を喜んだことも記憶にございます。

○ 1983 年 4 月から 1988 年にかけて，日本大学文理学部心理学研究室の村井健祐先生。

○ 1988 年から 1993 年にかけて，駒澤大学文学部心理学研究室の中村昭之先生。

○ 1993 年から 1997 年にかけて，日本女子大学に再びまいりまして，人間社会学部心理学研究室の高橋たまき先生。

○ 1997 年から 2003 年にかけて，白梅学園短期大学の心理学科研究室の荻野七重先生。

これらの先生方は非常にご苦労されたと思われます。深く感謝の念を申し上げたいと思っています。それから 2003 年 4 月から現在にかけましては，株式会社国際文献社のアカデミーセンターとなっています。事務局長は，2003 年から 2012 年にかけて東京富士大学の浮谷先生，2012 年 4 月から現在にかけては，日本体育大学の斎藤雅英先生，宇部弘子先生が，それぞれ事務局長をお務めいただいております。

それから，運営体制の組織も変更されました。2003 年，理事会制に組織が変更され，従来の会長が理事長に，運営委員，常任委員が理事，常任理事と変更されております。第 1 期・第 2 期の理事長は，岡村一成教授，第 3 期はここにおられます森下高治教授，第 4・第 5 期は藤田主一教授であります。

冒頭申し上げましたように，私は研究機関誌，発表論文集を精査しておりませんが，近年の学会で，非常に目覚ましい台頭を遂げておるのは，看護領域，医療領域の方々の研究発表，あるいは論文数，これが多くなっていることに気がつきました。昨日もポスター発表で拝見いたしましたが，この医療，看護領域の看護師の方々が研究発表をなさっておられました。横浜国立大学で行われました大会で，私どもの開発した安全行動調査を使われて看護師の方々が病院内の安全管理研究を発表されておられました。ポスター発表会場で意見交換したこともいまだによく記憶に残っています。

『日本応用心理学会史　学会活動の変遷，回顧と展望』の刊行

次は，『応用心理学会史　学会活動の変遷，回顧と展望』という本でありますが，これが現物であります。編集委員長は，日本大学の村井健祐教授でありますが，実は，この『応用心理学会史』が作られたエピソードがございます。

私は，日本応用心理学会以外に産業・組織心理学会と日本人間工学会に所属しておりますが，1994 年に産業・組織心理学会から『産業・組織心理学研究の動向，学会 10 年のあゆみ』という本を学文社から出版いたしました。その本を村井先生に進呈しました。そうしますと，村井先生は，「そうだな。俺たち日本応用心理学会もこういう学会に関する歴

『日本応用心理学会史
学会活動の変遷、回顧と展望』刊行
(1998年)

日本応用心理学会第82回大会@東京未来大学　　2015年9月6日

史的な展望，それをぜひ作っておく必要がある」と，村井先生が奔走され，この立派な学会史ができあがったのです。この本は非常に内容が充実しておりまして，私も随分参考にさせていただきました。

次は2007年に『応用心理学事典』が丸善から刊行されました。ケース入の分厚い本でありまして，編集委員長は岡村一成理事長であります。228人の方が執筆に参加され，670ページに及ぶ膨大な事典となっております。

広報誌『応用心理学のクロスロード』が刊行されました。Vol.4までは，年2回刊行されておりましたが，Vol.5から年1回の刊行に変わっております。特にVol.5, 2012年に刊行された中には，「日本応用心理学会の昨日から明日へ」という座談会が掲載されています。大村先生，藤田先生，荻野先生，浮谷先生，玉井先生が参加されて，日本応用心理学会の歴史を知るうえでも非常に参考になる広報誌でございます。

今後の学会活動への期待

最後は，将来への期待でありますが，先ほど申し上げたように，「応用心理士」の数が非常に少のうございます。ですから，この「応用心理士」の拡大，あるいは宣伝，啓蒙運動を行うということが必要ではないかと思います。先ほどの座談会で藤田先生が学会の規模を1.5倍にしたいということもおっしゃっておられたと思いますが，1.5倍に限らず，2倍，3倍と拡大して，この「応用心理士」の知名度，あるいは，実際的な活動ができるような機構をぜひ作っていただければと思います。

それから大先輩の先生方がご自分の研究を実社会と連携して，さまざまな実践活動を普及してまいりました。現在の日本応用心理学会も実社会との連携活動の普及，これに努めていただくことも必要ではないかと思っております。ぜひやっていただきたいと思っております。

また，現在，日本心理学会が全国規模で行っております，地域別の高校生を対象とした心理学講座の開講が参考となります。将来の応用心理学会の会員を増やすためにも，高校生への宣伝，啓蒙活動は非常に大切であります。したがって，各大学の応用心理学研究室の活動を高校生にもぜひ積極的に知っていただくような，そういう運動，あるいは実践活動，これを展開いただければというふうに思っております。

それから最後に，昨日，藤田理事長からご紹介ありましたが，現在進行中の『現代社会と応用心理学』全7巻，福村出版から刊行されています。これらの完結と成功を祈念して拙い講演を終わらせていただきます。

どうもご清聴いただきましてありがとうございました。

正田先生のご講演に対する盛大な拍手が鳴り響く中で，大変貴重なご講演が終了いたしました。

【追記】

2015年11月5日，藤田理事長より名誉会員の大村政男先生が10月31日にご逝去されたとの訃報を受け，驚愕しました。大村先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（上記の追記に関しましては，本原稿をご校閲いただく中でご講演者の正田先生よりお申し出があり，追記しておりますことを会員皆様にお伝え申し上げます。）